

これは7年間困難を抱えた王妃の話です。ある日、王妃は産気づいて陣痛で苦しんでいました。宮殿中の人々が忙しく上へ下へと動きまわりどうしていいかわかりませんでした。医者も何人かいました。そこへ盗みに入った泥棒がいました。盗みに入った時人々が忙しくしていたので彼は隠れていました。人々が落ち着くのを待ってから盗みをし、出ていこうと思っていました。さて、忙しい中人々が落ち着き眠りに着く中、泥棒は王妃の部屋の中に忍び入りました。赤ん坊は寝かされ母親も眠っており、召使いたちもみな眠っていました。さて、何を盗もうかと探し始めた時、かれは天井がぐるぐると回って3人の人が降りるのを見ました。その3人のうち1人は手に水を持っており、コップの中に入った水を持っており、もう1人はペンを、もう1人はインクを持っていました。水を持った人が水を取り子どもを洗いました。そしてペンを持った人はインクをつけてここに（どこかの体の一部を示す）生まれたばかりの子どもに書きました。《この王の子は幸せにくらすだろう、王の子として全てに恵まれる。しかしその後7年間の問題を抱えることになる。》そして彼らはいなくなりました。さて、泥棒はこれを読みました。どうしたことだ。王の女兒は7年間問題を抱えるのか。父親はその時どこにいるのだろう。王はどこにいることになるのだ。彼は自分に問いかけ興味を持ってしまいました。物は盗まず宮殿を下りました。翌朝彼は王に会いに来ました。彼は王に言いました。「あなたこそが私の王です。あなたのことを大変慕っております。王妃があなたの初の子を妊娠された時、私は、その子が生まれたら私はその子の召使いになるという誓願をしました。あなたのもとで死ぬまであなたの子に仕えます。」王は言いました。「しかし生まれた子は女の子だ。お前は男ではないか。」男は言いました。「問題ありません。私は洗濯もします、どんな仕事もしますから子どもと一緒にいさせて育てさせてください。」すると王は言いました。「わかった。もしお前がそこまで望むなら〔宮殿の中で〕部屋を探してやれ。」彼は雇われました。そして子どもが育って大人になるまで彼女に仕え、その子も彼は彼女の召使いで王のことを大変慕って王に頼みに来たのだと知っていました。王女が結婚しました。彼女は結婚しもらわれていくことになりました。さて、彼女が嫁ぐことになり誰と誰が王妃に着いていくかという時になり、男は王の足元に膝をついて言いました。「私はこの子と離れることはできません。私もついていかねばなりません。」彼は王と王女の結婚相手にも頼みました。「私は彼女と一緒にいたいのです。彼女と離れることはできません。」彼自身が心からそう思っていたのです。すると王が言いました。「では、連れていきなさい。」男は連れていかれることになりました。次の国へ行くと男は主人（王女の結婚相手）に従いました。王女と結婚したその王は彼の妻を大変愛していました。彼女のためにあらゆるものを用意し、毎日これをしてはあれを用意してといった感じでした。そして男は召使いとしてそこにいました。彼は王が妻にしてあげること全てをみました。その日も、何が起こったかわかりませんが、王が妻に対して怒り、妻が許しを乞うのをみていましたが何が起こったのかはわかりませんでした。王は妻を叩いて追い出しました。王は妻を追い出しました。男は、いつ彼が王女を叩き、ののしり、彼女を追い出したか全てを書きとめておき、王女が出て行く時は彼女について行きました。彼は彼女について森まで行きました。彼は彼女とどこへ行ったらいいのかわかりませんでした。歩いて行ってどこへたどり着くのかわかりませんでした。森に住み、木を切って小屋を建て王女と一緒に住みました。めでたいことに宮殿を出た時、王女はすでに妊娠していました。男は彼女とそこに住み、王女は出産し、彼が世話をしました。そして彼女と暮らし畑を耕して畑を作りました。彼自身が畑を耕しては耕して、子どもとその子の母親の面倒をみました。男はそこに暮らしました。さて、（王女の父親の）王は長らく何の連絡も聞いてお

らず心配をしていました。王は言いました。「私が探しに行こう。」しかし彼は私が行く、彼女に会いたい、わが娘にとっても長い間会っていないので会いたい、という旨の伝言を送りました。すると王女の夫は驚き「どうして私は彼女を追い出したのだ。彼女の過ちは大きな過ちではなかったのになぜ私は彼女を追い出したのだろう。彼女の父親になんと言ったらよいのだ。私も探しに出かけよう。」と思いました。そして王は出発し彼女を探しに行きましたがどこにいるのかわかりませんでした。そして、(彼女の父親である)王も出発し馬に乗って旅を始めていました(昔は旅をする時は馬だけでした)。馬と家臣、兵を連れ王は娘に会いにやってきました。さて、旅の途中、彼らは子どもが遊んでいるところに出くわしました。大きな子です。「この子は一体どこの子だ。」ぐるりと回って子に尋ねました。「うちはどこだ?」「あそこです。」子どもは彼らに示しました。「あそこに私の母親とも1人おじさんがいます。」すると彼らは子どもについてそこまで行きました。この王こそがその母親の父親だったのですが、そこに着いた時彼は彼女が自分の子だということもおろかその子が孫だということも知りませんでした。彼女と話をし水をお願いし彼らはそこで水を飲みました。すると、王女の夫もそこで降りました。そこに着くと彼は小屋で人々が子どもと座っているのを見ましたがそれが誰かは知りませんでした。彼女を見た時もそれが妻だとは気が付きませんでした。彼はそこに座り水をお願いし人々は水を飲み、食べ物を与えられ、*果物を出そう、果物を食べようといい、果物を食べました。さて、泥棒で子どもを育てたあの男は二人のどちらもわかっていました。そして王女自身もその人が父親でその人が夫だと、二人のことをわかっていました。彼は彼らにこれからがどこへ行くのか、あなたはどこへ行くのか、あなたはどこへ行くのかと聞きました。王は言いました。「私は娘に会いに彼女の夫のところへ行く。」つまりその男のことです。そして王女の夫は言いました。「私の妻は実は出て行ってしまいました。喧嘩をしまい彼女を追い出し、今は彼女を見つけて家に連れ戻したいと思っています。彼女の父親が彼女に会いに来たいのです。そしてこうやって出発しここまで行きましたが彼らがどこにいるかわからない。彼女が無事なのかかわからない。彼女は森の動物に食べられてしまったかもしれない。わからないのです。」さて、王女の父である王は怒り出しました。彼はその夫を叩こうとしました。すると王女を育てた男が言いました。「叩かないでください。こちらに来て親の中に座ってください。この女性がいうことを聞きましょう。」すると王女は言いました。「いいえ。わかりましたが、でも、あなたは私を育てた人です。あなたが彼に説明してください。」男は言いました。「王に申し上げます。私は泥棒でした。それもそうとうの泥棒でした。私は盗み目的であなたの家に入りました。この子が生まれた日です。」彼は3人の人々が降りてきたという話まで全部説明しました。彼は説明しました。「私は王の子が7年間どんな問題を抱えるのだ。父親はどうなるというのだ。と問うていました。そういうわけであなたのところへ子どもを育てさせてくれ、私は彼女のそばに四六時中いなければならないとお願いに来たのです。そしてこの女性に何が起こったのか彼女は夫から叱りを受け、叩かれて追い出されてしまったのです。」彼は言いました。この女性が言いました。「私の夫は私を大変愛してくれました。毎日私に何かをしてくれました。彼は私にとって何も問題ありませんでした。そして彼は私に金で鑄たベストを作ってくれました。(昔の人はこうだったのです。あの **Bi Kidude** も彼女は金のベストを鑄たと言っています。それはサルメ王女の写真にあるようなもので彼女は金でとても立派に鑄られた大きなベストを着ています。)王は私に贈り物をくれたのです。さて、私は水浴びに行き、釘のところにそれをかけて水浴びをしました。浴場に行って水浴びをしていると私は壁の中に吸い込まれていきました。どんどん吸い込まれていき、いなくなるまで取り込まれてしまいました。ベストは壁に掛けていたのです、私や驚きました。ああ、なんとということだ、私はこの中にベストを置いたのだ、どうやって取りだしたらいいのだと。夫に

そのことを言うと彼は私を叩き、追い出しました。私のベストはとても高価なものだと彼は言いました。「そうだ、私があなたに与えた。」彼女が話をしていると彼らがいる小屋の壁の中にベストが現われだし、みるみるうちに現われて、全てが現われました。彼女は言いました。「あれです。」王は驚きました。そして王は妻に許しを乞い言いました。「あれは単なる事故だったのに私はお前を追い出してしまった。追い出すようなことではなかった。」そして泥棒が言いました。「いや、喧嘩はしないでください。これは書かれた（定められた）ものなのです。私は子どもが生まれた最初の日から今日まで全てを見てきました。この問題は既に7年過ぎています。この子は今7歳です。」ですから子どもを引き取ってください。そしてあなたの妻も子どもと一緒に連れて行ってください。私はここにおいていてください。私はここに一人で暮らします。王妃は言いました。「いいや。お前も私たちと暮らすのです。あなたは私が死ぬまで面倒をみるといいましたそして私の子どもの面倒を見てきました。だから一緒に暮らすのです。」